



「森の芸術祭 晴れの国・岡山」 参加アーティスト／作品展示エリアを発表

2024年秋に岡山県北部で開催される国際芸術祭「森の芸術祭 晴れの国・岡山」では、参加アーティストの一部として16組が決定しました。また作品を設置するエリアについても詳細が決定しました。

岡山県北部には、中国山地の雄大な自然、旧街道の宿場町や城下町として栄えた歴史ある街並み、古くから受け継がれた伝統芸能、多彩な農産物など、魅力的な風景・文化・地域資源が数多くあります。これらの地域の魅力をこれまで以上に広く認知してもらうため、新たな切り口として「アート」の力を活用し、芸術祭を核とした周遊型の観光振興や交流人口の拡大、シビックプライドの醸成を図ります。

芸術祭は、国内外からアーティストや音楽家、ダンサー、建築家、デザイナー、華道家、料理シェフなど幅広いジャンルのクリエイターを迎え、新作の展示や、場所に合わせたユニークなプロジェクトを展開します。今回参加が発表されたのは、国内外で活躍する気鋭のアーティスト16組です。

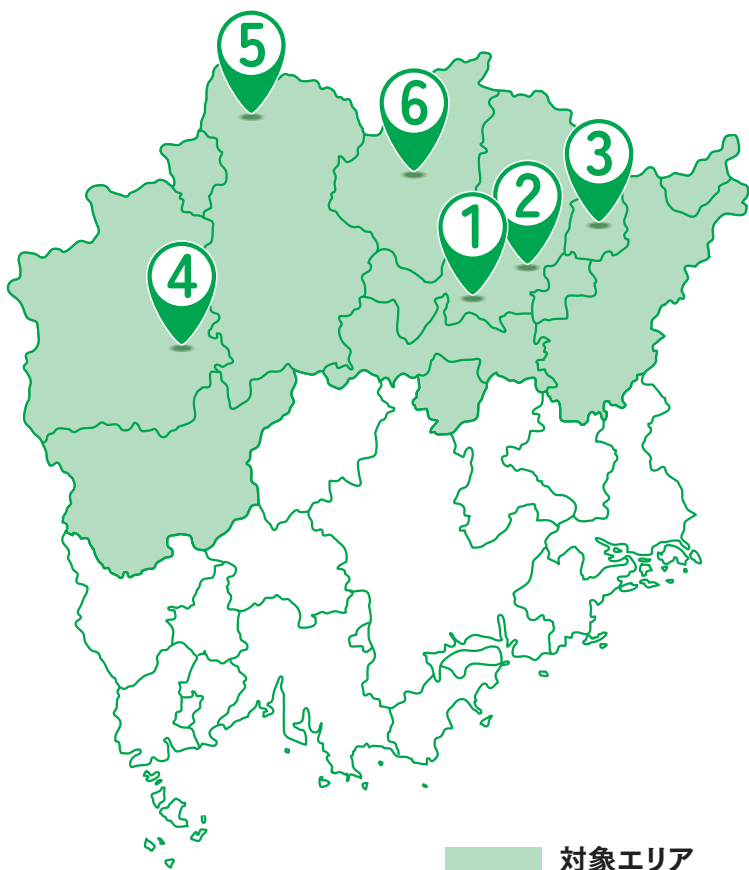
会期 | **2024年9月28日(土)～11月24日(日)**
開催エリア | **岡山県内の12市町村(うちアート作品設置は5市町)**
アートディレクター | **長谷川祐子(キュレーター、美術評論家、金沢21世紀美術館館長)**
主催 | **「森の芸術祭 晴れの国・岡山」実行委員会**

本資料に関するお問い合わせ |

「森の芸術祭 晴れの国・岡山」実行委員会 事務局
(岡山県産業労働部観光課内)

E-mail press@forestartfest-okayama.jp
Webサイト <https://forestartfest-okayama.jp>





対象エリア

1. 津山・津山城周辺エリア

津山市は、豊かな歴史や文化を有し、現在も県北部の中心都市です。中心部は、江戸時代には、津山城(鶴山公園)を中心に東西に城下町が栄え、当時建てられた木造建築と、明治・大正時代に建築された欧風建築が立ち並び、往時の繁栄と豊かな歴史を感じることができる場所となっています。また、1936年に建設された旧津山扇形機関車庫や国の名勝に指定されている衆楽園なども有し、津山市の歴史や文化の集積地の1つでもあります。

このように、このエリアには、自然環境、歴史、文化等の資本が交錯して現在のかたちが形成されています。衆楽園の庭園、古い町屋、大正時代の洋館、近代の歴史としての鉄道館など、江戸時代から近代への歴史をたどる場所が、アーティストたちが紡ぐ物語によって現代によみがえります。そこには工芸や手仕事への再評価とアップデートも含まれます。

2. 津山・グリーンヒルズ津山エリア

津山市中心地の北側に位置し、中国山地を望む丘陵地に広がる緑豊かな公園「グリーンヒルズ津山」は、25haの広大な敷地内に、カフェや遊歩道、フラワーガーデンなどが点在し、地域の憩いの場として広く親しまれています。公園内に立地している、ひときわ目を引くガラスドームの建築物「Globe Sports Dome」は、過去に日本建築学会賞作品賞を受賞しており、雄大な自然と、陽の光を浴びて燦然と輝く建築物とのコントラストが目を引きまします。この広がりや建物のスケールを活かしたパフォーマティブなプロジェクトが展開されます。

3. 奈義・奈義町現代美術館周辺エリア

奈義町は、中国山地の秀峰「那岐山」の南麓に位置し、季節ごとに自然と調和した雄大な姿を眺めることができます。また、移住や子育てへの支援を充実させることにより、2019年の合計特殊出生率が2.95と全国トップクラスであり、少子化対策の「奇跡の町」と称されています。

世界的な建築家である磯崎新氏が設計した「奈義町現代美術館」は、作品と建物が半永久的に一体化した公共建築として世界で初めての体感型美術館です。また、江戸時代から受け継がれてきた伝統芸能「横仙歌舞伎」は、年4回の定期公演を中心に地元に大切に守られています。

「奇跡の町」は、コミュニティ全体のユニークな意識の共有が背景にあります。それを取り込みながら、共有ヴィジョンの象徴となっている美術館や伝統芸能に新たな光を当てていきます。

4. 新見・満奇洞エリア

新見市は、岡山県の北西端部、一級河川高梁川の源流に位置し、清らかな水と自然豊かな地域であり、市内の大半がカルスト台地上に位置しています。市内には複数の鍾乳洞が見られ、その一つである岡山県指定天然記念物の「満奇洞」は、歌人・謝野鉄幹・晶子夫妻が、「奇に満ちた洞」と絶賛したことから「満奇洞」と言われるようになりました。悠久の時を経て生み出された自然の造形美は、色彩豊かにライトアップされ、幻想的な世界が広がっています。アーティストによる音と映像のインスタレーションが太古と現代を繋ぎます。

5. 真庭・蒜山エリア

真庭市は、岡山県北部の中国山地のほぼ中央に位置し、その北部のなだらかな高原地帯に位置する蒜山地域には広大な牧草場が広がり、全国屈指のジャージー牛の飼育地域となっています。

サステナブルの価値をより多くの人に知ってもらうための観光文化発信拠点施設「GREENable HIRUZEN」では、施設の象徴となる建築家・隈研吾氏が設計した「風の葉」をはじめ、ミュージアムやアクティビティを通じて、楽しみながら持続可能な暮らしを体感できます。また、市内には、かつては使われなかったまま森に放置されていた木材なども活用するバイオマス発電所があり、そこで作られた電気は市の施設や地域の小中学校などで使われています。

ここでは森の資源とサステナビリティ、共有をテーマにした作品が展示されます。

6. 鏡野・奥津エリア

鏡野町は、中国山地を背景とした森林地域の豊かな自然環境に恵まれた地域です。

吉井川沿いの3kmに渡り流れる奥津溪は透明度が高い美しい水が流れ、秋は紅葉の絶景が広がり、素晴らしい渓谷美を眺めることができます。また、奥津橋のたもとで行われる「足踏み洗濯」は奥津温泉のシンボリック光景となっています。

渓谷を歩いて行くときの空間や光の変化、水や木々の表情、これにアートを足すのではなく、これらの美をより生き生きと伝える仕掛けをアーティストが提案します。

1. 津山・津山城周辺エリア

作州民芸館



衆楽園



城西浪漫館(中島病院旧本館)



城東むかし町家(旧梶村邸)



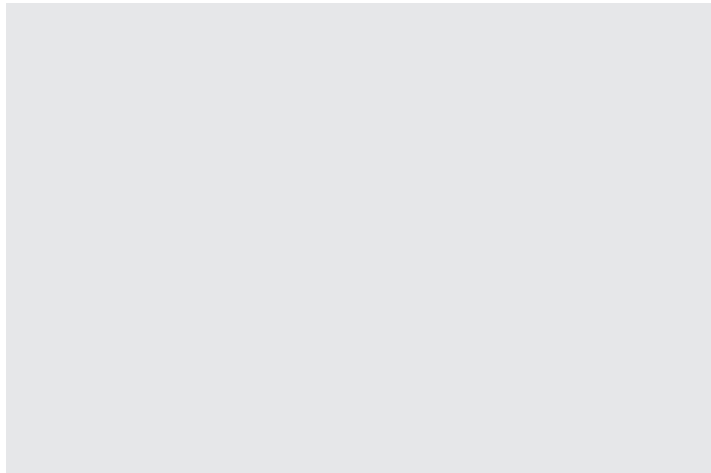
津山まなびの鉄道館



PORT ART&DESIGN TSUYAMA



2. 津山・グリーンヒルズ津山エリア
***2024年春発表予定**



3. 奈義・奈義町現代美術館周辺エリア
奈義町現代美術館



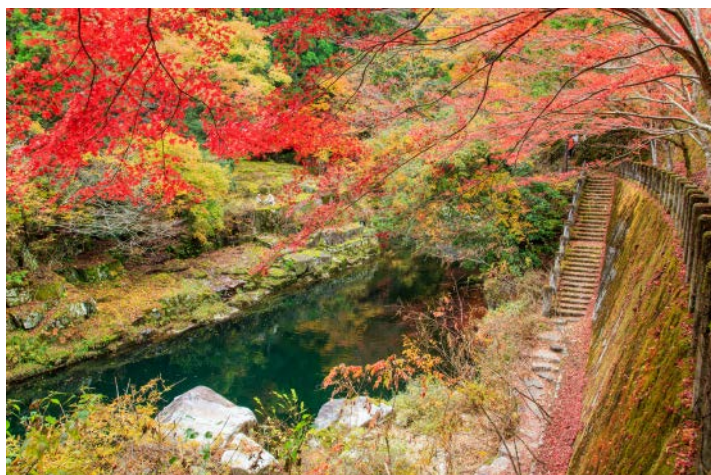
4. 新見・満奇洞エリア
満奇洞



5. 真庭・蒜山エリア
GREENable HIRUZEN



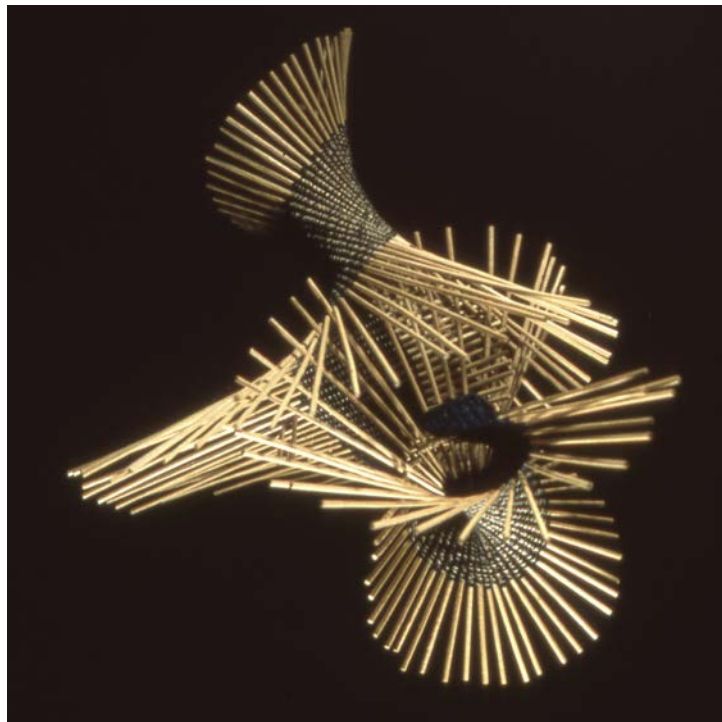
6. 鏡野・奥津エリア
奥津溪





Paola Besana | パオラ・ベザーナ

1935年生まれ（2021年没）。多様な社会的・文化的文脈から発展した高度な「織り」の技術の可能性に魅せられ、「織り」の3次元性を探究したテキスタイル作品を制作したアーティストである。時として巨大なスケールに達したそのテキスタイル彫刻は、民衆文化と現代的な抽象美術とをひと続きの線上に位置付けている。また、自作の制作と並行して、織物工房であると同時に研究・生産・教育センターでもある「Studio di Tessitura Paola Besana（ストゥディオ・ディ・テッシトゥーラ・パオラ・ベザーナ）」を30年以上にわたって主宰し、スタッフのパオラ・ボンファンテ、ララ・ランツァとともに、産業用テキスタイルや建築、舞台芸術、ファッションのためのテキスタイルのデザインに取り組んだ。また、従来は技術の表現として一般的であったパターン論ではなく、技術理論に基づいた新たな教育手法も開発した。教育・研究活動と並行して、織り製品や織りサンプル、伝統的な織物やテキスタイルのライブラリーなどからなる膨大なコレクションも収集・管理した。そのコレクションは現在、「パオラ・ベザーナ・アーカイブズ」で見ることができる。



Paola Besana,
Una Strada Lunga (1971)



Photo by Laurent Lecat

Bianca Bondi | ビアンカ・ボンディ

1986年、ヨハネスブルグ（南アフリカ）生まれ。パリ在住。領域横断的な活動を実践するアーティストで、主に塩水を使った化学反応により、ありふれた物体を活性化あるいは崇高化する。ボンディが作品の素材とする物体は、予想される変化や、その物体が本来備えている固有性や象徴性などを基準として選定されている。視覚を超えた体験を創出し、相互の連関、はかなさ、生と死のサイクルといった概念に焦点を当てながら、「物質の生命」に目を向けさせようとするのがボンディの試みである。生態学やオカルト科学に情熱的ともいえる関心を寄せ、その2つを融合させることで多分野横断的で可変的な作品を生み出す。ボンディの作品では物体の「アウラ」が重要な役割を果たしている。置かれる場所と作品とが強い結びつきを示す、サイトスペシフィックで詩的な作品も多く手掛けている。



Scrying in Astral Ponds, 2022 Photo: Jean-Christophe Lett
©MAMAC, Nice / Bianca Bondi / ADAGP



撮影：朝岡英輔

AKI INOMATA

1983年、東京都生まれ。東京在住。多摩美術大学 非常勤講師／武蔵野美術大学 非常勤講師／デジタルハリウッド大学 大学院 特任准教授／早稲田大学嘱託研究員。2008年東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。生きものとの関わりから生まれるもの、あるいはその関係性を提示している。主な作品に、「やどかりに『やど』をわたしてみる」(2009-制作中)、「犬の毛を私がまとい、私の髪を犬がまとう」(2014)など。主な個展に、十和田市現代美術館(2019 青森)、北九州市立美術館(2019 福岡)、ナント美術館(2018 フランス)。国際展・グループ展に、「あいち2022」(2022 名古屋)、「Broken Nature」ニューヨーク近代美術館(2021年 アメリカ)、第22回ミラノ・トリエンナーレ(2019 トリエッナーレデザイン美術館、イタリア)、タイ・ビエンナーレ2018(クラビ)など。作品の主な収蔵先に、ニューヨーク近代美術館、南オーストラリア州立美術館、金沢21世紀美術館、北九州市立美術館など。



昨日の空を思い出す Thinking of the Yesterday's Sky, 2022- ongoing ©AKI INOMATA



Umesh P K | ウメッシュ・P・K

バローダ(ヴァドーダラー)在住のインド人アーティスト。人間の周囲にある自然界をインスピレーションに、すでに失われてしまった人間と自然とをつなぐ回廊をテーマとした作品を制作している。その芸術活動を支えているのは、神話や表象の歴史、精神世界などに対する関心である。ウメッシュの作品に登場する緑豊かな風景は、インド最南部、豊かな生態系を誇る西ガーツ山脈とアラビア海沿岸部に挟まれた細長いケララ州で育った幼少期の体験がベースになっている。ウメッシュ自身の言葉によると、創作活動は瞑想的なものであり、絵画史上の様々なムーブメントや各地の絵画の伝統を参照しながら、絵画をその基礎的な構成要素——色の相互作用、線や形の遊び、二次元の平面にもたらされる空間感覚など——から理解しようとする試みなのだという。ボース・クリシュナマチャリのキュレーションによる「Lokame Tharavadu」(世界はひとつの家族／コチ=ムジリス・ビエンナーレ財団の主催により2021年にアラップーザで開催)など、様々な展覧会やアート・フェスティバルに参加している。



Light flows like water, 2017 ©Umesh P.K.



片桐功敦 | Atsunobu Katagiri

1973年、大阪府生まれ。華道家、花道みささぎ流家元。中学卒業後に米国留学、1994年に帰国。1997年、家元を襲名。2005年、堺市で教室とギャラリーを兼ねた「主水書房」を開設、若手アーティストの発掘、展示や出版など多岐にわたって展開。東日本大震災後の福島を訪れ、原発周辺の地で再生への願いを伝える作品を制作、撮影した写真集『SACRIFICE — 未来に捧ぐ、再生のいけばな』（青幻社）を2015年に上梓。作品のスタイルは、小さな野草をいけたものから現代美術的なインスタレーション作品まで幅広く、いけばなが源流として持つアニミズム的な側面を掘り下げ、文化人類学的な観点から植物と人間の関係性を紐解くことを目指している。国内外での個展、ワークショップを中心に活動している。



片桐功敦《LIGHT OF FLOWERS》2021年



川内倫子 | Rinko Kawauchi

1972年、滋賀県生まれ。2002年に『うたたね』『花火』で第27回木村伊兵衛写真賞受賞。2023年にソニーワールドフォトグラフィーアワードのOutstanding Contribution to Photography(特別功労賞)を受賞するなど、国際的にも高い評価を受け、国内外で数多くの展覧会を行う。主な著作に『Illuminance』(2011)、『あめつち』(2013)、『Halo』(2017)など。近刊に写真集『やまなみ』『橙が実るまで』(田尻久子との共著)がある。2022-2023年に東京オペラシティアートギャラリーでと滋賀県立美術館で個展「川内倫子:M/E 球体の上無限の連なり」を開催した。



川内倫子《無題》(シリーズ〈Illuminance〉より)



Kimsooja, 2016, portrait image, photograph by Gianni Vastardis, Courtesy of EMST, Athens, Greece and Kimsooja Studio

Kimsooja | キムスージャ

1957年、韓国・大邱(テグ)生まれ。現在はソウル、ニューヨーク、パリを拠点として活動。コンセプチュアルなマルチメディア・アーティストとして国際的に高い評価を受けている。サイトスペシフィックなインスタレーションを複合的に提示することによって創出されるその作品は、美意識や文化、政治、環境といった問題をテーマとしつつ、人間の条件に関する考察の場ともなっている。近年の主な活動としては、2023年のフレデリクスベア美術館(デンマーク)での個展「Cisternerne」や、2022年のメス大聖堂(フランス)のステンドグラス作品の永久設置、シドニー(オーストラリア)のニューサウスウェールズ州立美術館(AGNSW)による大型インスタレーション作品の収蔵などが挙げられる。また、「ドクメンタ14」(ドイツ)、ヴェネツィア・ビエンナーレ(イタリア)、サンパウロ・ビエンナーレ(ブラジル)など、国際展にも多数参加出品している。



Kimsooja, *To Breathe*, 2023
Site-specific installation consisting of diffraction grating film.
Installation view at Galeries Lafayette Haussmann, Paris, France, 2023
Courtesy of Lafayette Group and Kimsooja Studio. Photo by Jaeho Chong



© Takeshi Miyamoto

森山未来 | Mirai Moriyama

1984年、兵庫県生まれ。5歳から様々なジャンルのダンスを学び、15歳で本格的に舞台デビュー。2013年には文化庁文化交流使として、イスラエルに1年間滞在、Inbal Pinto&Avshalom Pollak Dance Companyを拠点にヨーロッパ諸国にて活動。「関係値から立ち上がる身体的表現」を求めて、領域横断的に国内外で活動を展開している。俳優として、これまでに日本の映画賞を多数受賞。ダンサーとして、第10回日本ダンスフォーラム賞受賞。東京2020オリンピック開会式では鎮魂の舞を踊った。近年の活動として、パフォーマンス「FORMULA」(2022 企画構成・演出・出演)、ソロパフォーマンス『Osmosis』(2023 金沢21世紀美術館 企画構成・演出・出演)、企画展「なむはむだはむ展『かいき!はいせつとし』」(2023 太田市美術館・図書館/神戸・バイソンギャラリー)、アートイベント「KOBE Re: Public Art Project」(2023 キュレーション)、映画「シン・仮面ライダー」(2023)、『山女』(2023)など。2022年4月より神戸市にArtist in Residence KOBE (AiRK)を設立し、運営に携わる。ポスト舞踏派。



《The Pure Present》
(2022年/演出・出演/大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ「最後の教室」にて)



撮影：柴田れいこ

太田三郎 | Saburo Ota

1950年、山形県生まれ。岡山県津山市在住。71年国立鶴岡工業高等専門学校機械工学科卒業。80年より発表をはじめ。採集した種子を和紙に封入して、切手に仕立てた作品《SEEDPROJECT》や、戦争後の様々な問題を取り上げた〈POST WAR〉シリーズなど郵便切手を用いた作品を作り続ける。近年の主な展覧会に、「太田三郎ー此処にいます」(2019 岡山県立美術館)、「MOT コレクション Journals 日々、記す vol.2」(2021 東京都現代美術館)、太田三郎展：人と災いとのありよう」(2022 BBプラザ美術館)、など。主な受賞歴に、平成30年度地域文化功労者文部科学大臣表彰(2018)、第73回岡山県文化賞(2021)など。作品は東京国立近代美術館、東京都現代美術館、国立ドレスデン版画素描館(ドイツ)、ソウル国立現代美術館(韓国)など、国内外の美術館に収蔵されている。



太田三郎《庭の情景》



Smitha G S | スミッタ・G・S

ケララ州コーリコードのマラパール地方(インド)出身。独学のアーティストで、幼少時代に周囲にあふれていた自然のメモリーの記憶に影響を受け、動物たちや自然の緻密な美に焦点を当てた作品を制作している。スミッタの作品に描かれる人物像は脇役にすぎないことが多かったが、2010年代になってそのスタイルに変化が起こる。ケララ州で発生したニパウイルス感染症の流行を取り上げるなど、社会的なテーマが織り込まれ、人間の脆弱さと予測不可能な動物の世界とを対比させた作品が生み出されるようになった。新型コロナウイルス感染症によるロックダウンも大きな変化をもたらし、自宅に籠っての制作の中で、幸福感に満ちた宇宙の創造に取り組むようになった。動物たちの世界を描いた初期の作品と異なり、コロナ禍以降の作品には人間の姿が多く描かれるようになり、そこにはマラパール地方の伝統芸能や儀式、それらと自然との関係性も取り入れられている。スミッタの作品はボース・クリシュナマチャリのキュレーションによる2021年の展覧会「Lokame Tharavadu」(世界はひとつの家族)に選出された。この展覧会がスミッタのアーティストとしてのキャリアの大きな転換点となり、インド国内外の様々な芸術施設やギャラリーがスミッタの作品を評価し、購入するようになる。



Smitha G S, Untitled, Acrylic on Canvas, 2022 ©Smitha G S



Sejima Kazuyo © SANAA

妹島和世 | Kazuyo Sejima

1956年、茨城県生まれ。建築家。1987年妹島和世建築設計事務所設立。1995年西沢立衛とともにSANAAを設立。2010年第12回ベネチアビエンナーレ国際建築展の総合ディレクターを務める。日本建築学会賞*、ベネチアビエンナーレ国際建築展金獅子賞*、プリツカー賞、芸術文化勲章オフィシエ、紫綬褒章などを受賞。主な建築作品として、金沢21世紀美術館*、Rolex ラーニングセンター*(ローザンヌ・スイス)、ルーヴル・ランス*(ランス・フランス)などがある。

*はSANAAとして



© SANAA



© Jukan Tateisi

立石従寛 | Jukan Tateisi

1986年、アメリカ合衆国シカゴ生まれ。現代アーティスト。仮想と現実、自然と人工など、相対する境界の分解と合成をテーマに制作を行う。主な作品に、浜辺に浜辺を積層させる《Beach on Beach》、霧に向かって私的モノローグを公共放送システムに乗せて発する《To The Fog》、森の中に鑑賞空間持ち込む《In(to)stallation》など。また、音楽や映画、パフォーマンス、フードプロダクトなど、無領域的に活動する。英国の現代アート賞「New Contemporaries 2021」入選。英国Royal College of Art 芸術修士号修了。



Abiotope 2019 © JukanTateisi



Photo by Pauline Assathinay

Rirkrit Tiravanija | リクリット・ティラヴァニ

1961年、ブエノスアイレス（アルゼンチン）生まれのタイ人アーティスト。旧来の展覧会形式を否定し、料理や食事、読書といった日常的な行為の共有を通じた社会的交流を提示する活動で知られている。その作品は、芸術品の優位性を拒絶する環境を創出し、モノの利用価値や、単純な行為と共同体内の相互扶助を通じて人々を互いに結びつけることに焦点を当てるとともに、労働や技巧にまつわる既成概念の打破を試みる。現在はコロンビア大学芸術学の教授を務め、アーティストや美術史家、キュレーターが参加するコレクティブ・プロジェクト「Utopia Station(ユートピア・ステーション)」の創設メンバーでもある。チェンマイ（タイ）近郊に拠点を置く環境教育プロジェクト「The Land Foundation(ザ・ランド・ファウンデーション)」の設立にも協力した。



untitled 1990 (pad thai),
Opening event at Paula Allen Gallery, New York, 1990.



Photo by Yoshihiko Kojima

上田義彦 | Yoshihiko Ueda

1957年、兵庫県生まれ。写真家。多摩美術大学グラフィックデザイン学科教授。東京ADC賞、ニューヨークADC、日本写真家協会作家賞など、国内外の様々な賞を受賞。2011年にGallery916を主宰。代表作に『Quinault』、『at Home』、『Materia』、『A Life with Camera』、『FOREST 印象と記憶 1989-2017』、『68TH STREET』、『林檎の木』、『Mäter』、『いつでも夢を』(赤々舎 2023) などがある。また2021年公開の映画『椿の庭』は大きな反響を呼び、映画監督としての仕事も注目されている。



Yoshihiko Ueda, Quinault, No.1, 1991



Photo by Richa Sahai

Asim Waqif | アシム・ワキフ

1978年、ハイデラバード(インド)生まれ。デリー在住。デリーの都市計画建築学校で学び、映画やテレビ番組のアートディレクターとして働いた後、独立系の映像作品やドキュメンタリーの制作に従事。現在はアーティストとして自らの作品制作活動に取り組んでいる。近年は建築、アート、デザインにまたがる領域横断的なプロジェクトを展開しているが、その背景には現代の都市設計や公共空間の占有／介入／利用にまつわる政策への強い意識がある。プロジェクトの一部は、社会の下層に追いやられた人々の隠れた活動空間として機能する廃墟を舞台としている。ワキフの作品には、生態学や人類学に対する関心もしばしば織り込まれている。特に水、廃棄物、そして建築に関わる地域固有の生態系管理システムについて、ワキフは広範な研究を行ってきた。その作品の多くは、制作に手作業を伴い、多大な労力を要するように意図的に仕向けられている一方で、完成した作品そのものは一過性で、やがて崩壊することを前提としているものさえもある。彫刻からサイトスペシフィックなインスタレーション、映像、写真まで幅広く制作し、最近では伝統的な手法と新たなテクノロジーを融合させた、大規模でインタラクティブなインスタレーションも手掛けている。



Improvise, 2022, site specific installation for the Kochi Muziris Biennale
Bamboo, woven pandanus leaves, ropes
Photo: Kochi Muziris Biennale



Photo by Silvia Plantini

Giacomo Zaganelli | ジャコモ・ザガネッリ

1983年、イタリア生まれ。フィレンツェとベルリンを拠点に活動。地域コミュニティを対象とした芸術文化プロジェクトのアーティスト、キュレーター、および活動家。土地、環境、景観を通じて解釈される空間の概念の社会的及び公共的な側面をリサーチする。2010年には、空き地が提供する可能性について市民と行政の意識を高めるため、放棄された遺産をテーマにした先駆的な研究プロジェクト「La Mappa dell'Abbandono: 見捨てられた場所の地図」を立ち上げた。2015年以来、台湾と日本で継続的に活動している。近年の主な活動に、個展「Superficially」(2018 MOCA 台北)、「Grand Turismo」(2018・2019フィレンツェ ウフィツィ美術館)がある。また、瀬戸内国際芸術祭(2019 日本)、タイランド・ビエンナーレ(2021 タイ)に参加した。



Giacomo Zaganelli, *Somsed Temporary Cultural Center*,
Thailand Biennale 2021, Korat Thailand

森の芸術祭特製パフェの開発

県北部の食の魅力を発信するため、開催エリアの特産品を使用したパフェを新たに開発・レシピ化しました。なお、今年度はプレイベントとして試行的に限定販売し、来年度の芸術祭本番において、エリア内のカフェ等にレシピを提供し、広く展開します。



パルフェ レザン

季節が廻り、儚い美しさをイメージしながら、温かなソースがこの一品に特別なライブ感を添えます。ピオーネとシャインマスカットがふんだんに使い、各層に異なるアレンジをした果汁が洗練された美味しさを引き立てます。口に運ぶ瞬間から贅沢なぶどうを感じるパフェです。

小麦 | 津山市
ピオーネ | 美咲町
シャインマスカット | 岡山県産

素材 | ソースバルサミックレザン、シュクレティレ（飴細工）、ピオーネ・マスカット、ホワイトチョコ、シャンティレザン、スポンジ、白ワインのゼリー、赤ぶどうのゼリー、ぶどうのガナッシュ

販売期間 | 2023年10月19日（木）～12月10日（日）

販売場所 | THE HILLS HOUSE TSUYAMA（津山市大田831）



パルフェ ポワール・マロン

新鮮な梨を、そのままの食感とみずみずしさを保ちながら、コンポートに仕立て、和梨の繊細な香りを引き立てつつ、洋梨のような食感に仕上げ、梨と栗の組み合わせで秋の風情をお楽しみいただける一品です。キャラメル濃厚な風味と栗の香り、梨のみずみずしさが、温度変化によって移りゆく味わいを楽しむことができます。

小麦 | 津山市
梨 | 新見市
ジャージー牛乳 | 真庭市
栗 | 勝央町

素材 | オパリーヌ（飴細工）、マロンクリーム、クラスアモンド（アーモンドアイス）、マロンシャンティ、スポンジ、栗の甘露煮、和梨のコンポート、サブレ、和梨のコンフィチュール、キャラメルソース

販売期間 | 2023年10月19日（木）～11月中旬頃

販売場所 | THE HILLS HOUSE TSUYAMA（津山市大田831）



鈴鹿成年 | Naritoshi Suzuki

美咲町出身。33歳。岡山県立津山東高等学校食物調理科卒業。株式会社シュゼット・ホールディングス（兵庫県西宮市）勤務。本年1月、フランスリヨンで開催された「第18回クープ・デュ・モンド・ドゥ・ラ・パティスリー」において、鈴鹿氏がリーダーを務める日本チームが世界第1位に輝く。

コメント |

生まれ育った岡山県北の地で、森の芸術祭というアートに触れ合える機会があることは、本当に素晴らしく、パフェの監修者として参加させていただけることは非常に光栄に思っております。

今回のパフェは、この県北エリアの素材を活かし、この地域の豊かさを感じていただけるようにと思いながら作成しました。

「食感や香りなど楽しむ」

「演出によるライブ感を楽しむ」

「食べて楽しむ」

そんなパフェでお客様の思い出の一ページに刻んでいただくと幸いです。

ぜひ是非ご賞味ください。



「森の芸術祭 晴れの国・岡山」 シンポジウム

地域の機運醸成と芸術祭の全国的な認知度向上を図ることを目的に、シンポジウムを開催します

日時 | 2023年12月3日(日) 13:30-15:25

場所 | ザ・シロヤマテラス津山別邸「コンベンションホール鶴山」(津山市山下30-1)

内容・出演者 |

第1部 パネルディスカッション
テーマ「森の芸術祭は地域に何をもたらすのか」

伊原木隆太(「森の芸術祭 晴れの国・岡山」実行委員会 会長)
長谷川祐子(アートディレクター)
和田優輝(㈱和田デザイン事務所代表)

第2部 トークセッション
テーマ「“森”の魅力とアート」

長谷川祐子
森山未来(俳優/ダンサー)

募集期間 | 2023年10月13日(金)～11月24日(金)

定員 | 250人 *先着順

*シンポジウム終了後、
森の芸術祭特製パフェのメディア向け試食会を予定

